

『秋のわかれ』 解題と翻刻

——江戸中期の丹後俳壇と京俳壇——

京都府舞鶴市郷土資料館に、故糸井仙之助氏旧蔵の文庫がある。その糸井文庫は、丹後俳壇の様相を知り得る貴重な俳諧資料を蔵する。ここに紹介する『秋のわかれ』（改訂版丹後郷土資料目録の分類番号 十、イ、5）は、そのうちの一冊である。本書は、『改訂版国書総目録』によれば、他に所在が知られない。なお、同書中に「未下百尾編」とあるものは、「木下百尾編」の誤記であり、この場を借りて訂正しておきたい。

本書は、中興期丹後俳壇の様相と、丹後俳壇と京都俳壇との関わり方とを知る資料として貴重である。小室洗心（万吉）著『丹後俳人集』（私家版）に詳しく紹介されているが、論述に必要な箇所を適宜編集しているため、全文の翻刻から知り得る情報が得られないので、重複するところも多いのであるが、ここに全文の翻刻を行なう次第である。

本書の書誌を記す。外題「秋のわかれ」（中央・原・刷・貼題箋）。半紙本一冊、縦二二・五糎、横十六・〇糎。墨付十八丁。安永六年九月、木下百尾の序文。刊記は「洛陽書林橘屋治兵衛梓行」。内容は、丹後の俳人である季友の追善集。編纂者は、百尾。

季友は、藤田氏か（『丹後俳人集』による）。別号に千鳥庵。宮津宮本町住、紺屋業を営む。安永六年七月八日没。丹後俳壇の中心的人物の一人。

百尾は、木下氏。別号に橘中亭。湊屋五兵衛。法名一叟了白庵主。宮津住。寛政十年六月二五日没。国清寺に葬る。真照寺住職である鷺十の実質の後継者であり、丹後俳壇の中心的人物の一人。

『秋のわかれ』の成立に関わって、京都の中川蝶夢は、丹後に赴き、土地の有力俳人である馬吹、鷺十、百尾、東陌らと追善の歌仙を巻き、発句を詠んでいる。この頃の丹後俳壇は、蝶夢を通して京俳壇に繋がっていた。蝶夢が、京都の京極に住まいしたり、東山の岡崎に五升庵を構えて、『墨直し』や京都での芭蕉忌を主催していた頃である。そして、『秋のわかれ』には、京都をはじめとして諸国から、追善の句が寄せられている。京都は、重厚を筆頭に、吾東、諸九、附尾、鯉風、蕪村、斗酔である。また、伊賀、近江、中国、九州、東海、奥州、北陸など、蝶夢と親交の厚い人々も句を寄せている。これらの多くは、丹後俳人と同様に、指導者的存在であった蝶夢に繋がる人々である。

なかでも、井上重厚は、京都の筆頭に置かれている。重厚は蝶夢の高弟であり、明和七年に去来の落柿舎を再興し、京都俳壇に重要な位置を占めていたからであろう。

また、与謝蕪村の入集には留意すべきであろう。同句は、当時の自信作であり、それを旧知の季友追善句として贈ったのであるから、彼の並々な

竹内 千代子（英知大学文学部助教授）

住所 京都市中京区壬生馬場町 16-11 粟田方

らぬ心境が察せられよう。そこには、安永頃の丹後俳壇と京都俳壇との繋がり方も反映していると思われる。つまり、丹後の俳人たちは、蝶夢だけではなく蕪村との交際をも求めた。地方俳壇の多くは、中央俳壇との接触を持つとき、複数の師と交わる。かつては丹後に住し、丹後俳壇の実力者である鷺十との交際が深かった蕪村という存在であつてみれば、百尾ら丹後の俳人達が好んで交際を求めたことは、想像に難くないのである。蕪村もまた、丹後俳壇を大切にしたのである。

さらには、後年、京の東山に移住した高桑闌更も、この時は未だ加賀住まいであったが、句を寄せており、丹後俳壇の交際の広さを示す一資料となっている。後に闌更は、京都東山に芭蕉堂を創立し、天明六年三月十二日に芭蕉追善会を修し、『花供養』を刊行する。丹後俳壇の連中は、『花供養』を通じても京俳壇に繋がっていく。ただし、天明六年のものに、丹後俳人の入集はみられない。

このように、『秋のわかれ』には、中興期の京俳壇を担う蝶夢、重厚、蕪村、闌更(ただし、後年)らと積極的に交渉を持ち、自分たちの俳壇を形成しているという、丹後俳壇の縮図が見て取れるのである。具体的には、蝶夢主催の『墨直し』(明和二年三月十二日から同七年興行分)から、蝶夢の京都での芭蕉忌『しぐれ会』(入集する明和五年十月八日から安永二年の京都での興行分)へと展開する。また、一方では蝶夢・重厚主催の『しぐれ会』と、他方では、後年の闌更の『花供養』を通じての交際へと展開するのである。

翻刻

凡例

一、漢字・かなの表記は、原則として現行のものに統一した。

- 一、丁移り、改行は、必要の無いかぎり明示しなかった。
- 一、句読点、濁点等は、私に付した。
- 一、漢字一字のおどり字は「々」で、二字以上の繰り返しは「く」で統一した。

秋のわかれ (外題)

きのふといひ、けふとくらして、はやき月日のはての日になり侍れば、宝寿精舎に法筵をもうけて、四花八月の俳諧を供養し、つらくなき人の生涯をおもふに、うまれつき自然におかしみありて、風月のさびしみをしれり。その身すくやかにありければ、幾度か神風や山田が原の郭上に参宮の笠をかたづけ、あるはみくまの岸うづ波の花に笈摺をぬらし、つねにはいかいの発句に世情をつくし、禅意をさへさとり得て、日夜の談笑いまでも聞こゝちす。されば、行住座臥について吟魂をうごかしける逸士なりしもいかにせん。此疾ありて年月なやみけるが、ことし卯月の比より家の傍に閑室をつくり、引籠りて髪をおろし、後生のつとめの外他事なし。かくて三伏のたえがたきに、日によはりもて行て、終に文中の八日の夕ぐれ、萩ふく風にさそはれ行ぬ。予も断琴の友をうしなひ、悲しみにたえて、その住ふるしたる一間の机を見れば、としころ吟じ出たる発句を書置る一冊ありけるに、こころちかきわたりの風友のいたみたる句、かつは、なき人の存生にしたしかりし人の句をあつめて不朽に残さんと、其名を秋のわかれと題し、季友居士の霊前に捧る。時は安永西のとし暮秋 百尾書之

季友居士遺草

ほし合や下ははかなき飛鳥川
虫の音や家中やしきの宵月夜

魂まつり此氣を親の在す時
 紅に咲くつくろひもなし女郎花
 あきのくれ遠目は物のなつかしき
 名月や黄金を削る葉の雫
 落る日にまだ食るか百舌の声
 仏檀へ種のこぼるゝ鶏頭かな
 隣ともしらで来て居る瓢かな
 白雲に身はうづもれて葉ほり

冬

しぐるゝやわが身の尺の管の下
 なまじみに咲てあはれや帰り花
 寒月やむかしは伊達に頭巾着し
 節季候や茜もれ出る鬢の霜
 海士の火にすかして寒し波がしら
 冴々て月の細みや雪の山

春

あのやうに老たきものよ梅の花
 うぐひすや初音くばりに遠歩行
 渺々としろき蛇籠に柳かな
 また立て鳶の舞けり春のくれ
 親鳥も物くふことか乙鳥
 小男鹿や落した角を嗅て見る
 野臥よ風うつすな春の草

旅行

けふの雛われも馬乗人形かな
 菜の花の中に匍匐ふ三輪の山

まじくゝと桜がもとの椿かな

よし野にて

花の山ちらく杉のくもりかな

夏

ほとゝぎす水田にしらむ朝朗
 短夜といはれぬけさの牡丹哉
 二度高野山にて鏡岩に向ふ
 紫陽花や終には老の化すがた
 夏山や霞ひかゝりし磯の隈
 坪の蓮二輪ともなき詠かな

此人や身は市中に在ながら、心を
 風雲流水にをけば、女わらべも紺
 屋何がしとはいはで、季友どのと
 呼て、たゞならぬ風雅のすきもの
 なりしに

さればこそ終れる時も月の秋
 手向る草はいろくゝの花
 山道の露に直衣の袖ひちて
 椽に筵をころばして敷
 うちそろふ斬の音に槌の音
 船はのこらず川を出て行
 明しらむ雲に北斗の影うすき
 いまやくと待合の鐘
 しばらくはこらへた嚏三つ四つ
 引ちらしたる綾にふと布

蝶夢 馬吹 鷺十 百尾 東陌 者三 東渚 跨山 好古 巨江

駿河町折々富士は曇れども
 菅笠さげていとまごひする
 勘当も赦りて添るゝ中となり
 一日たらぬ年の世話しき
 酒屋から咲せてもどす梅の花
 みな古代めく庵の什物
 ほんのりと山をうちこす海の色
 早う泊りて月を見に出ん
 椀の蓋とらぬうちから袖の匂ふ
 そよめき立て飛鳥風ふく
 雨あがりいつにか花の真盛
 耕す馬で送る竹斎
 かさね着をおかしがらるゝ春となり
 陽気ほのくゝと折の杉の葉
 移徒の先へきてゐる鶉鶏の声
 砂ふき上る水のすゞしさ
 対王が鏡もついでに研てやり
 拍掌といへどならぬ物なり
 松陰へから乗物をよせてをく
 世が治りて鷹の逍遙
 白々と自在にまどふ櫓けぶり
 母親ばかり知たわづらひ
 くりかへし返す薄雪物がたり
 藪垣もるゝ月の夕に
 小鯛の苞に付たる油筒
 相撲ときけばむかし床しき

鷺橋 也長^{少年}
 尺布 其水 斗杯 蘭巴
 文之 西洲 花友 野涼
 路巧 山呼 季月 陌児
 起童 吐繡 些紅 乙舟
 李郷 鳥秀 川迹 兎乗
 閣右 友二^{少年} 木父 三之

鴨川を前に二階も五六畳
 来いゝと召す中院殿
 めづらしい雪の寒さは苦にならず
 追悼
 あぢきなく鳴らで過にし瓢かな
 いかに見ん彼ノ岸によりてけふの月
 あたらものかくれし月の雨夜かな
 倂や梅にむかへば猶かなし
 好の名も噂となるや莓の露
 風いかに夕の露の置どころ
 やすくちる身こそ一葉の無一物
 花木槿きのふはけふの夢となり
 文月に見しその夢をわかれ哉
 月のころあたら桜もかれにけり
 燈籠にあはれうき世の嵐かな
 琴断ん今は秋風の吹ばかり
 猶かなし名残の中に鹿の声
 かねてちる一葉と聞ど今朝の秋
 いかにせんわが影法師を月の友
 塚の前に馬追虫の真似やせん
 文月の中を引さくわかれかな
 乾たる硯に露の手向哉
 見樗 文設 之芳
 峰山 三思 塘雨 瓦全
 甫尺 笑声 孤舟 芝月
 岩滝 河守 尺布 夢友
 浪花 魯口 宮津 鷺十
 文設 空山 者三 好古
 跨山 之芳 吟松

聞て今朝しめるや袖は露ならず
 問をかぬこと身にしむや筆の跡
 あきのかぜ吹ちりて行人いかに
 夕月や空言ならぬ筆のあと
 花ちりてかひなき蘭の匂ひ哉
 大空の音と聞夜や秋の風
 夢さめてまことの秋の涼しきや
 はかなくも夢とちらつく切篋哉
 聞毎に雁鹿虫の声かなし
 蓮の実の飛て行多や西の空
 影ふまぬ月ぞかなしき此ゆふべ
 俤とばかりちりゆく花火哉
 はつ秋のつらくすゑの物悲し
 泥水のさとりははやく蓮の実や
 いまさらに筆のかほるや蘭の花
 鳴たつやあとは空しき水の音
 あさがほの手をはなれたるおもひ哉
 葬もしぼめば遠き別かな
 ちるからにこぼれぬ萩の露
 文月も音信のなき別かな
 大木のたふれた跡や鴟の声
 言の葉は絶たり露の手向草
 おしめどもとまらぬ水やちる柳
 露添て七日くや草の花
 袖にをく露もこぼるゝ手向かな

松甫 桂夫 東面 謝石 百尾 馬吹 野涼 李郷 些紅 起竜 山呼 閑右 東渚 斗杯 西洲 乙舟 其水 陌児 路巧 蘭巴 鷺橋 三之 木父 兔乘 花友

送り火の行ゑたのもし西の空
 虫の音を添て経よまん塚の前
 いとゞ鳴やまた苔をかぬ塚の上
 一葉づゝ散てたむけの紅葉哉
 蚊の声のかなしくのこる夕かな
 手向れば露となりけり塚の水
 其為になるとは聞ど踊まし
 我身の老さらぼひて小水の魚の
 ごとくなるもおもはで、たゞ季
 友子が身まかりけるを歎く
 目にかゝる稲妻ばかりいなづまか
 社中の懇志よりくさぐさの手向
 を給りて亡父が靈魂を吊慰し玉
 ふことをよるこびて
 彼岸へ吹音ゆかし秋のかぜ
 四季混雑
 蝶はまだ生れぬ先や若菜摘
 我宿の直に浄土や夜の雪
 水落て田毎もたゞの月夜哉
 冬籠こゝろに隙はなかりけり
 吹かぜに身を持かねしばせを哉
 けふ死る鳥もあるらん放生会
 とまりたき草は風ありあきの蝶
 畑うちやよし野の道はをしへても

鳥秀 吐繡 巨江 文之 見樗 少年也長 友二 東陌 吐風 麦士 竹甫 南畝 素涼 魚監 田切垂耳 久美風草 鷺十

口ほどは身も働て揚ひばり
 柴の戸を敲く月夜のさくら哉
 幾筋も道は出来たり花の山
 先達の法螺かする也夏の山
 花ざくら抱て見るや座頭の坊
 寝ころびもならで更行火鉢哉
 朝顔の手を引あふやことし竹
 日のかげや難面うごくすゝき原
 しらつゆや消のこりたる野宿の火
 滝壺にたぎる気色やふぢの花
 谷底に雪の橋ありはつ桜
 春もはや水うつ門と成にけり
 寝て聞ば踊も秋の声なりし
 牛の尾も吹なびいたる尾花哉
 短夜や寝たとてもどる酒徳利
 竹椽を尻におぼへつ衣がえ
 草の名もひとつになりて枯野哉
 かけかふや目をすつて居る渡し守
 猫にくれる肴も棚にとし用意
 虫も穴出てありがたき彼岸哉
 鐘の音も霞やすらん涅槃の日
 墨染のすがたに似たり冬木立
 秋のくれ隣から子をかりに来る
 酒こそと身には覚へて葉ほり
 はら／＼と釣瓶にかゝる柳哉
 かげろふや一筋くろき蟻の道

文設 空山 者三 好古 跨山 之芳 吟松 馬吹 百尾 野涼 李郷 尺布 些紅 起龍 山呼 閣右 東渚 斗杯 西洲 其水 陌児 木父 兔乘 鳥秀 花友 吐繡

寒声や更て研の物すごき
 見おろせば雲の裏なるひばり哉
 夢になれとおもふもあるを郭公
 足あとのつかぬ方へと汐干哉
 かんこ鳥聞日は馬も駕もなし
 荅たる梢よりちるこてふかな
 松がえに隈のうすさよ臙月
 さく花や木陰にあそぶ玉箒
 我宿もしられぬ雪のゆふべ哉
 兄の元服しけるに
 咲梅はあとの荅のちからかな
 蝉啼や椽にほしたる竹の皮
 吉日をえらびて出か曆うり
 蜻蛉やかげから先へ飛て行
 秋たつや日に／＼かはる海の色
 春またぬ身も数ゆるや寒のあき
 我好た道を恵方やあそび初
 河豚汁やかくまで欲はすてがたし
 歩行ずにあそぶ工夫や冬ごもり
 舞て行雪のなごりや水の音
 あさがほや己が露をこぼすまで

路巧 巨江 三之 文之 蘭巴 鷺橋 少年也長 友二 提孟 牡丹 見樗 川途 乙舟 吐風 東陌 阿誰 湊支百 善王寺 竜山 河辺 八橋 同積 工父 洛陽 重厚

諸国各録

足のべて寝るや月夜のはしり舟

ちるかして虻のなくなり夜の花
墨に染ん後世を願ひの糸なれば
おもひ切よくぞちりたる椿かな
藤の花咲くたぶれしすがたかな
朝風の吹きましたる鶉川哉
扇かざす半蔀ゆかし夏の月
横にしたばかりで悲し涅槃像
せわしなう硯のかはく夏書哉

病中

いざ髭の長さくらべんきりくす
ふはくと泡ながるゝや春の水
うつくしき顔は一人やねはん像
雪つむか夜とゝもになく山鳥
冬ごもり壺にたゝへし酒一斗
月入てきらく涼し天の川
秋の暮とし数へてはわびしかる
あさがほや早う咲なば蚊の吸ん
水際もその静さよ蓮の花
まざくと冬の来さまの霜気哉
卯の花や裾のよごれし雨上り
原中に一寸ち梅の匂ひかな
ながめ入る我影ぼしや秋のくれ
菊苗やたのまれぬ秋の身をたのみ
わくら葉のちるや動かぬ水の上
花うりの空音いひけり初ざくら
はつ雁やきのふの雨は何地の島

吾東

尾諸九

附尾

鯉風

蕪村

斗醉

桐雨

浮流

近江 馬瓢

素兄

冬柱

李夕

古声

一幹

雨銘

其両

一雄

其勇

桃葉

五明

白許

立季

素輪

白露

蘭戸

母におくれしころ

いざよひやあきらめて見る月のかげ
菜大根の花納りぬくれの雨
雪や降ん楸の枯葉さはぐ音
茶の花や垣根もすけし尼が家
はつ雪や山はたかきにしくはなし
梅が香にしろき飯くふ世也けり
蔓も見へず薺さきぬ露しぐれ
昼飯は男なみなり田うへかな
きそ山や山にはさまる秋の空

冬秀

陸奥 巨石

舍樂

斧用

越中 直生

加賀 闌更

若狭 北雅

但馬 木卯

行脚 一音

洛陽書林橘屋治兵衛梓行

付記

本研究は、舞鶴市教育委員会からの受託研究「舞鶴市郷土資料館蔵糸井文庫の展示とデジタルアーカイブに関する研究」ならびに、文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業「デジタル時代のメディアと映像に関する総合的研究」のサブプロジェクト「テキストとイメージ」による研究成果である。

翻刻にあたっては、舞鶴市教育委員会社会教育課吉岡博之氏の御高配を得ました。記して深謝申し上げます。